

2014年8月3日 聖餐礼拝
説教 「神の友、アブラハム」
創世記 18 章 16-33 節

【神の友】

聖書は驚くべきことを記します。「アブラハムは・・・神の友と呼ばれたのです」（ヤコブ 2:23）。アブラハムは、神の友。神がアブラハムの友というのであれば、わかります。でも、アブラハムもまた神の友となったというのです。なんということでしょうか。

友とは、どのような存在でしょうか。主イエスは、「わたしはあなたがたを友と呼びました。なぜなら父から聞いたことをみな、あなたがたに知らせたから」（ヨハネ 15:15）と言われました。友とは他の人には隠されている秘密を打ち明けてもらう人。神さまが、アブラハムには、ご自分の思いがわかると、思われたのでした。私たちがまた主イエスの友。神の友。主イエスがそのように呼んでくださったからです。

【とりなすアブラハム】

神さまからソドムとゴモラを滅ぼさなければならぬことを打ち明けられたアブラハムは、神さまに交渉して、どんどん譲らせていきます。最後は 10 人の正しい人がいたら、滅ぼさない、とまで。交渉相手の神さまは、言われるままに、ずるずると後ろに下がって行く。まるで、アブラハムに押されるのを望んでいるかのように。それも、そのはずです。神さまは、

もともと罪人をなんとか滅ぼさないでおくことはできないかと、心を痛めて地上に下ってこられた（21）。アブラハムもまた、罪人を惜しんで取りなしています。だからここで行われていることは、実は交渉ではないのです。対立していないからです。神さまとアブラハムは、同じ側に立っています。交渉するようになって、実は滅びを引き延ばしています。くどくどと、罪人を惜しんでいるのです。

その中で、神さまとアブラハムの絆はますます深くなっていきます。そして、アブラハムはこの押し問答の中で、成長していくのです。すもうに、ぶつかり稽古というのがある。ひとりがぶつかって行き、もうひとりがそれを受け止めて、押されて行くのです。このぶつかり稽古には決まり事がある。それは、受け止めて押される側の力士の方が力が強いということ。力が強い方が、ぶつかられるのです。そして押されてやる。そうすると、ぶつかる方はとても鍛えられる。アブラハムはそうのように神さまにぶつかった。何度も「主よ。どうかお怒りにならないで」くださいと恐れながらも神さまにぶつかっていった。ぶつかるつどにますます大胆に神さまに近づくことに成長したのです。

【祭司アブラハム】

アブラハムは、とりなす祭司として神と人との間に立った。でも、それは、アブラハムだけではない。キリスト教会では、万人祭司という

言葉をよく使います。牧師や神父だけではない。主イエスのものとされたすべての教会員は、祭司。神さまに対して、とりなしの祈りをささげる者。人に対しては、神さまのみ言葉と恵みを伝える者。私たちは、みな、アブラハムのような祭司とされています。

祭司には、どうしても知っておかなければならないことがある。それは、罪人に対する神さまのこころの痛み。その痛みを知り、その痛みを神さまと共に味わうこと。罪人を、なんとか覆おうとする心。自分のことを忘れて覆う心。

アブラハムの子孫から、たびたびそういう人々が現れました。例えば、モーセ。そして、ついに、主イエスが「父よ、彼らをおゆるしてください」と十字架でとりなしてくださいました。大祭司イエスには、他の祭司と、決定的にちがうところがあります。それは、主イエスは、祭司であると同時に、供え物にもなった、ということ。ご自分が、犠牲の小羊として十字架に架かってくださったのです。

【祭司である私たち】

主イエスは、私たちにいのちを与えてくださった。新しいいのち。柔らかいいのち。互いをあわれみ、覆い合う生き方。われを忘れて自分を与えてしまう生き方。すでに神の友とされている私たちです。もういちど、その特権を思いだそう。今、聖餐によって、私たちのうちの新しいいのちを新たにしてくださいませ。